

0から始めるアニメ最終回企画 アンソロジー

re0kikaku

はじめに

こちらは二次創作作品となります。

当然ですが、原作、アニメ、公式一切とは何の関係もないファン・フィクションです。

アニメ最終回を記念した「意味深表紙イラストに合わせて短編小説を書こう！」に参加いただいた作品をまとめさせていただきました。

参加して下さった皆様、読んでくださる皆様、本当にありがとうございます。

リゼロアニメ最終回企画アンソロジー

I. ヴィルフレムの失態

II. 新たなる旅立ちへ

III. 繋いだ手

IV. 水たまりに沈んだ柘榴

1. ヴィルフレムの失態



この作品は『Re:ゼロから始める異世界生活』及び『リゼロEX2』の内容を元にしております、ご了承ください。

「ぐ……あ……」

口に土の味。陽光に照らされた地はほのかに温かく、そのぬるさにかえって敗北を強く突きつけられる。

打ち据えられて地面に倒れ伏すのはヴィルヘルム・トリアス——もとい、『剣鬼』ヴィルヘルム・ヴァン・アストレア。

およそ現ルグニカにおいて最強の剣士……であるはずのヴィルヘルムは、今なぜか完全に敗北していた。

後悔に顔を歪めるヴィルヘルム。

その横ではグリム・ファウゼンが『やれやれ』と言いたげに肩をすくめていた。

——十——

事の発端はその日の朝にあった。

「お出かけしましょう！ お花畑に！」

天色の瞳を煌めかせ、燃えるような赤髪を躍らせて。

可憐な表情の中に凜々しさをにじませる女性——『当代剣聖』テレシア・ヴァン・アストレアが宣言する。

立ち上がり、にっこりと笑って言ったテレシアに、彼女の付き人であるキャロル・レメンディスが首をかしげる。

「花畑ですか？」

「そう！ この間、家に働きに来てる女中の子が王都の近くにとっても綺麗なお花畑があるって言ったの」

テレシアは腰に手を当てて、むふんと得意げな表情を浮かべる。

「だからね、お弁当持ってお出かけしようと思うの。せっかくのお休みでしょう？ お天気も良いし、お花見しにいかない？」

そんなテレシアの提案に、その場にいたグリムはにっこりと笑い、『楽しそうだね』と書く。キャロルも「それでは、早速準備をしませんと」と台所へ向かっていく。

「……………」

「……………」

そうして残されたのは二人。

テレシアとヴィルヘルム。

「ヴィルヘルム、花は……」

「分かってる、分かってる。嫌いじゃない。俺はお前が行きたい所について行く。そのために俺はここにいるんだ。部屋にこもっているより良いだろうしな」

「やった！ありがとう！」

喜ぶテレシアを見て、ヴィルヘルムは顔を逸らす。むすりと黙り込んでしまったヴィルヘルムにテレシアはくすくすと笑みをこぼす。

不器用な愛情に身を焼かれながらテレシアは幸せを噛みしめる。

「それじゃあ、私はキャロルのことを手伝ってくるわね」

そう言ってテレシアも台所へ消える。

と。

ここまでは、良かったのだったが……。

準備を終えて、一同は花畑へと向かった。

せっかくの綺麗な景色、竜車で乗り付けるのも無粋であろう、と徒歩で向かうこととなる。幸い四人ともルグニカでも上位の強者であり、文句を零す者もない。

そして、

「わあ！」

王都からそう遠くない平野に一面の野花が広がっていた。

混然として、しかし力強い輝きのある花々にテレシアは目を輝かせる。

珍しいことにヴィルヘルムまでもが薄く笑みを浮かべる。

白い花、赤い花、そして黄色い花。小さなものから大きなものまで、そよそよと風に撫でられて香りを運ぶ。

「とっても素敵！こんなにすごい花畑、今まで知らなかったなんて！」

テレシアは幼い少女のようにくるくると回りながら走り回る。
抜けるような青空と色とりどりの花に、鮮烈に赤い髪がよく映える。人を惹きつけるその美しさにキャロルは思わず息を呑む。

「……美しいですね」

溜息と共に発せられた言葉に、グリムは『それ、僕に聞く？』と苦笑する。

「みんな、お弁当にしましょう！ こんな景色の中で食べたらきっと美味しいわ！」

「はい、テレシア様」

楽しい休日の光景。

そう、だから本当にここまでは、良かったのだ。

食事を終え、のんびりと時間を過ごす四人。

口下手な男と話さない男の二人がいるせいもあり、静かで落ち着いたひと時。

そんな中、テレシアが緊張した面持ちで籠から何かを取り出す。

「ねえ、ヴィルヘルム。その……焼き菓子は食べる？」

おずおずと差し出されたそれを、ヴィルヘルムは一口かじる。

テレシアはごくりと喉を鳴らし、ぐっと力を入れる。

「……おい、キャロル」

眉をひそめたヴィルヘルムは、低い声で呟く。

「菓子作りを失敗したのか？」

「え？」

「いつものと違う味だ、舌触りも良くないな」

「えっと、それはつまり……」

「——不味い」

容赦のないヴィルヘルムの評価に、『テレシア』がぴしりと固まる。

不穏な空気も感じたグリムが菓子を食べて『充分美味しいと思うけど』と慌ててフォローする。

キャロルもしどろもどろになりながら、言いにくそうに口を開く。

「た、食べられないほどではないでしょう？」

「いや、いらぬいな。元々それほど甘いものは好きじゃない。この程度ならわざわざ食べる気はしない」

必死にフォローしようとするキャロルをばっさりと切り捨てる、空気の読めないヴィルヘルム。

そして、その横でテレシアが赤い顔でぷるぷると震えていた。

「……？ テレシア？」

「ヴィルヘルム」

瞳に涙を溜めたテレシアが小さく言う。

「そのお菓子、作ったの私よ」

「なっ！？」

テレシアに睨まれて、ヴィルヘルムは大きく狼狽える。

「いや、その……」

「知らないっ！」

頬を膨らませたテレシアの手に握られたスプーンが閃く。

尋常ならざる技巧で振るわれたスプーンがヴィルヘルムを地へと叩きつけた。

「ご、はっ！？」

無防備だったヴィルヘルムは何も出来ないまま地を転がる。

テレシアは泣きながら立ち上がると、そのまま王都の方へと駆けていく。

キャロルも慌ててついて行き、花畑には額を押さえるグリムと地に伏せったヴィルヘルムが残されるままだった。

「……………」

グリムはがっくりと肩を落とすと『とりあえず君は、奥さんには物理的に勝てそうに無いね』と書いた。

「言うな……」

『ヴィルヘルムは人の気持ちわからないからね』

「うるさい……」

そうして話は冒頭に戻るのであった。

結局残された二人もすごすごと屋敷へと戻る。

だが、それからのヴィルヘルムは苦難の連続だった。

「テレシ——」

「ふんっ」

顔を合わせれば逃げられる。

女性と喧嘩をしたことなど無かったヴィルヘルムはどうすることもできずにいた。

無理やり話そうとするも、負い目のあるヴィルヘルムではテレシアに勝つことが出来ず、物理的に追い返される。

「どうすればいい」

グリムが『僕に言われてもなあ』と言いたげに首を振る。

『時間を置くしかないんじゃない？』

「それは、その……居心地が悪い」

『こういうときはきっと気の利いた贈り物と心からの謝罪がいいんだろうけど……君には、難しいよね』

「……ちっ」

そわそわと落ち着かない様子のヴィルヘルムに、グリムはくすりと微笑む。

抜き身の剣のようだった彼が、一人の女性に翻弄されているのはなんだか不思議な光景だった。

『剣鬼といえども、恋模様にはたじたじだね』

「黙れグリム、にやにやするな」

友人の新しい一面を楽しむグリム。

まあ、でも、と。

『君たちには、君らなりのやり方で仲直り出来るだろうから、僕はあまり心配してないんだけどね？』

「あ？」

そうとだけ書き残して、グリムは帰っていった。

「自分なりの……やり方？」

——十——

ヴィルヘルムとテレシアが喧嘩して、数日経った。

「————」

「あら……」

台所へ立つテレシアに叩きつけられたのは身を焦がすような剣気だった。

ずっと包丁を構えたところに、真剣が振り抜かれる。

ぎゃり、と刃と刃が擦れる音。

一合、二合。斬り結ぶたびに火花が散る。

銀閃煌めく長剣と包丁。歪な剣の立ち会い。

とはいえ、得物の差は大きく。

きいんとひとときわ高い音が鳴り、テレシアの手から包丁が弾き飛ばされた。

長剣の持ち主——ヴィルヘルムはそのままテレシアを抱き寄せる。

「……ずいぶん乱暴だと思うんだけど」

「すまん」

「こうやって……抱きしめてたら誤魔化せるって思ってる？」

「許せ……俺にはこれしかどうすればいいかわからなかった」

「——まったく、もう」

ヴィルヘルムの腕の中で、テレシアが力を抜く。

そして、しゅんとした顔でテレシアは謝る。

「ごめんなさい」

「……なんでお前が謝るんだ？」

「だって、お菓子が美味しく無かったのは本当のことだもの。もちろんあんなに酷く言われて悲しかったけれど、それでこんなに怒ってたのも、悪かったなあって」

申し訳なさそうに笑うテレシア。

「あれからキャロルに教えてもらって、練習したの。あなたに不味いって言われたままなのも悔しいでしょう？」

「すまなかった……」

「また作ったら、食べてみて？ ……あ！ 気を使って美味しいって言ったりしないでね？ 今度こそ、ちゃんとヴィルヘルムが美味しいって思えるようしてみせるんだから」

「ああ、楽しみにしてる」

笑い合う二人は、腕の力を強くして、ぎゅっとくっつく。

「あのお花畑、また行きましょう？」

「ああ」

「今度は、二人だけで……ね？」

赤い顔でそっぽを向くヴィルヘルム。

ヴィルヘルムの胸に顔を埋め、微笑むテレシア。

結局二人はキャロルに見つかるまで抱きしめ合っていたのだった。

表紙・由様

文・浜木綿様



II. 新たなる旅立ちへ



新たなる旅立ちへ

4章を読み終わってない人はネタバレになる部分があるのでご注意を!!

何かに揺り動かされるように目を覚ます。

「ん——ああ、夢か」

夢と理解していること、それを理解し認識していながらも、ここに存在していただけること。

魔法か何かだろうと当たりをつける。

しかし魔法とは便利なものだ。

不可思議な現象や法則すらねじ曲げるような出来事さえ"魔法"とひとくくりに出来てしまうのだから。

まあそれはいい。

今はこの不思議な夢空間を調べるのが先だ、とスバルは体を起こしつつ呟いた。

「しかし、改めて見ると不思議な場所だな!」

辺りを見回すが、何もない。

ただただ闇が広がるのみだった。

「ううむ、俺の夢にしては足りない。もうちょっところ、華やかさっていうかぶっちゃけエミリアさんとレムが——」

と、そこまで言いかけ口を閉じた。

思い出すのはあの死闘。

ナツキ・スバルが全てを出しきって掴んだ結果。

最高ではあったが最良ではなく。

得たものと失ったものは余りにも大きすぎた。

失ったものの為、得たものを躊躇いなく捨て死を選んでしまう程に。

次は何も失わない、全てを救うべく行動した結果——その思いは崩れ、代わりに『魔女』という

強大過ぎる力を手に入れた。

それが間違いかそうでないか、答えを導くことの出来る者は存在しないだろう。

「後悔はしちゃいねえ、おかげでここまで来れた」

力は使い方で何にでもなってしまうのだから。

「で、だ。ここからはどうやったら出れる訳よ」

その呟きはむなしく宙に溶けた。

「とりあえずなんかやってみるか。ハッ、ワープ!!」

手を掲げ、SFなんかでよくある移動法を唱える。

静寂。

何も起きることはなかった。

「知ってたよ!!大丈夫だ想定済み、別にやってみたかったけどやる機会なかったから今やった訳じゃない」

自身への言い訳なのか、あらぬ方へ向かって叫んでいる。

チャームポイントともいえる髪をいじりつつ、頭をフル回転させ今後の行動を決定する。

そして出た結論は――

.....

現状維持。

何かしてもどうにもならなそうなので、何か起きるまで待つことにしたスバルだった。

――それからどれだけの時が経っただろうか。

素数を数えるのにも飽きてきた頃、目の前の空間が揺らめいた。

「おっとお、ボスさんのお出ましか?言うておくが俺は弱い、囧が精一杯だ!」

そんなスバルの言葉は流されつつ、揺らいだ空間から現れる何か。

手だった。

死に戻りのことを言おうとする度に現れ、身体の中を這い回るあの手。

「よりによってお前か。ボスどころかラスボスじゃねえかよ……」

頭を抱えている間に『嫉妬の魔女』が、サテラが現れる。

エキドナの所で見えた時と一緒に、違うところがあるとすればそれは。

「なんでアイツの所以外で出てこれるんだよ……」

ここがスバルの夢空間である、というところだろう。

謎な点が多すぎるが、今はこの状況をなんとかしなくては。

「お前が何の為にこんなことをしたかは分からないし、知ることも出来ない。言いたいことは一つ。早く俺を帰してくれ」

「それであなたは救われる?」

待ち続けて返ってきた彼女からの答え。

それは答えにならない答え。

だがスバルは理解していた。

「ああ、アイツの力を借りれば救いたい人を救えるし俺も救われる」

「……そう」

「だからお前がくれたこの力、ありがたく使わせてもらう。俺自身の未来の為に」

この先どれほどの困難が待ち受けているだろう。

今までは誰にも言えず抱えてきた。

でも、これからは一人じゃない。
心強い奴がいる、信用も出来る、はずだ。

「あなた自身も大事にしてね……？」

「ああ、分かってる」

それだけを言い残し、彼女は去って行った。

「自身を大事に、か……やれるだけやってみるか。ん？」

彼女が去ってしばらくして、この夢空間に光が差し込んできた。

「どうやら帰れそうだな、良かった良かった！」

光が全てを覆い尽くすまでさほど時間はかからないだろう。
スバルは今後の行動を考える。

「さーてと、エキドナと話し合っただけでどうするか決めないとな」

スバルはそう言って光の差す方へゆっくりと歩き出した。

「どんな手を使ってでもお前らを救い、願いを叶える——待っててくれ」

ここから始まる、望む未来へ至る道。

その道の果てが望む未来であるかどうか、知る者は一人としていない。

だが彼女は祈った。

そこにある未来こそ、彼が求めた物であるようにと。

後書き

こういうのを書いたのは始めてですが難しいものですねえ.....

楽しんでいただければ嬉しきものです!!

表紙・かんらん様

文・宵咲綺羅様



III. 繋いだ手



繋いだ手

ヴィルヘルム、と愛しき声が耳を擦る。

いつのまにか背後に立っていた彼女が、深紅の髪をなびかせ微笑んでいた。青い瞳はヴィルヘルムを透し、彼の背景で海のように揺らめく花たちを映しているのだろう。

「やっぱりここにいたのね」

鈴を転がすような声。かつて花は好きかと問うた少女の声は、一緒に過ごすようになって数年経った今でも、ヴィルヘルムの鋼に熱を灯す。

「……まだ時間はあるだろう」

「むう。早く行きたいの。私、ずっと楽しみにしてたのよ？」

「盛り上がるのは午後からで、今から行ったって時間を持て余すだけだぞ」

大衆行事に参加したことがないというテレシア。お祭りへ行くという約束をずっと前から楽しみにしていたのは知っている。

しかし、この地域の祭りはどちらかといえば季節の変わり目を祝うもので、昼に街へ降りたところで普段とそう変わりはない。彼女にとっても夜のほうが楽しいのは確かだ。

「いいのっ。それまで買い物とかするんだから」

「それなら先に行っていればいい」

わかってない、と膨らました頬をさらに赤くして怒る彼女を尻目に、ヴィルヘルムは花の波へ歩んだ。陽光のような柔らかい黄色が揺れる。

「あっ、そうだ。じゃあ、こういうのはどう？これから花瓶を買いに行くの。それでね、少しだけ花を摘ませてもらって食卓に飾るの」

楽しい夢を語る子供みたいにきらきらした、瞳の中の青空。

想像してみる。広いけど物が少ないあの部屋に置かれた、小さな花瓶と小さな花。テレシアの笑顔が食卓の向こう側で咲く。

静かな部屋が鮮やかに彩られる。は、と息を吐いた。

「……たまには買い物も悪くないな」

「でしょ？」

繋いだ手の温かさが心地良い。

「ねえ、見て」

空に紫がかかり、いくつかの街路灯も橙をつけ始めた頃、テレシアがふと指をさした。

彼女が見上げる先には、街のシンボルとされる大きな樹。目を奪われる。

「綺麗ね」

「……ああ、そうだな」

葉以外をつけることのない樹だが、今は沢山の幻想的な光が、まるで実のように枝先に灯っていた。恐らく、細工したラグマイトをスタンドグラスのような素材で作られた球体に閉じ込め

て作った装飾だろう。

極めて簡単な仕掛けだが、目を見張るほどに美しい。

多くの人が樹を見上げ足を止めている。葉の下では、幹を囲むように走り回り遊ぶ子供。

いつのまにか人通りが増え、楽団の演奏なども聞こえていた。もうすぐ、一番祭りの盛り上がる時間だ。

「あのね」

光を眩しがるかのように目を細めるテレシア。

「私、街にあまり遊びに来たことがなかったでしょ。ずっと買い物とかしてみたかったし、お祭りにも毎年来てみたいと思ってたの。

だけど、私がそんなことしていいのかな、幸せでいいのかなって。怖かった」

何が、とは聞かない。ヴィルヘルムは見上げた先の明かりから視線を逸らさなかった。

「いいんだよね。私、もう、いいんだよね。こんなに幸せで、」

零れた涙がじんわりと地面に消えていく。

「お前が幸せで、笑顔でいてくれないと困る」

繋いだ手は怖いほどに細い。

「じゃじゃん。昨日買った花瓶がここにあります」

いたずらっぽい笑顔でテレシアが、透き通った水色を見せびらかす。

いつものように廃墟の一つに腰かけたヴィルヘルム。

「どう？ここの花に会いそうでしょ」

「まあ、いいんじゃないか」

嬉しそうに口元を綻ばせる彼女に、渡した小さな花束。澄み渡った青色の目が、不思議そうに、自分の手元の黄色を映した。

「どうしたの、この花束」

「テレシアが来るまでに予め摘んでおいた。花、挿すんだろ」

驚きに満ちた表情が、数回の瞬きのあと、満開の笑顔に変わる。

「ヴィルヘルムも楽しみにしてくれてたんだ」

「別に花は好きじゃないけどな」

「嫌いでもなくなったんでしょ？」

どことなく悔しい気持ちを抑え、あいまいに頷く。笑いながらもテレシアは、ありがとう、と花束を受け取り花瓶に挿した。

「まったく、照れ屋さんなんだから」

「誰が照れ屋さんだ」

「ヴィルヘルムに決まってるじゃない。だって貴方って素直じゃないんだもの」

素直じゃないのは自覚しているが、面と向かって感情を表現するのはどうも苦手なのだ。

「……でも、それがヴィルヘルムらしくていいと思うわ。私はそういう所も好きよ」

熱くなった顔を見られたくなくてそっぽを向いた。視線を感じるが、目を合わせられない。

「ちょっと！こっち向いて。貴方は私のどんなところが好き？」

「.....それも、いつか気が向いたときな」

「もう！前の答えだって聞いてないのよ」

いつかっていつ、と頬を膨らませる彼女。結局、いつも臆病に逃げてしまう。

「絶対言わせてみせるんだから。.....でも、今日は許してあげる。家に帰ったらヴィルヘルムはこの花を飾ってくれる？私は飲み物を入れるね」

けれど、今はそれでいいと思えた。

「ああ。じゃあ今日は早く帰ろう」

繋いだ手が何よりも愛おしい。

表紙・由様

文・なな様

IV.水たまりに沈んだ柘榴



その日は、所用によりロズワール領内のある街へ行く事になっていたのだが、連日降り続く雨が激しさを増してきたことにより出立出来ないでいた。

「止みそうに無いわね...」

重い雲が垂れ込める空から降り頻る雨が、先の山に灰色のベールを被せよく見えない。そんな風景が広がる窓の外を見ていたエミリアは小さく息をつく。

せめて少しでも弱まればと、僅かに見上げた所に吊り下がっている人形を指先でつつく。それはスバルとペトラが量産していく『てるてるぼーず』なる物で、スバルの故郷ではこれを雨止みを願う窓辺に吊るすおまじないであると言う。

ぷらーんと緩く揺れる人形は柔らかい藁を丸めて古い布生地で包んでぶら下げただけの簡易な物だが、丸く膨らんだ部分に顔が描かれ一体一体僅かに違う笑みを浮かべている。エミリアも描かされたが、中々うまく描けたのではないだろうか。そう胸を張るが、受け取ったスバルからの評価は「ど、独創的だね！うん！味があっていいんじゃないかなあ！？」とのことだから、まあ察してほしい。

ガタリと音のする方へ目を向けると、エミリアのすぐ隣で「よいしょっと」足台に登ったペトラが、完成した15体目のてるてる坊主を吊り下げている所だった。「あーしたてんきにしておくれー」と愛らしく歌う姿を見ていると自然と頬が緩んでしまう。なるほど、確かに抱き締めたくなる可愛さだ。

そしてスバルは、少し離れた所で16体目のてるてる坊主を作成していた。材料にと物置から発掘してきた古いシーツはこれで使いきりだ。中身の藁は先程ので無くなってしまった為に、花瓶に飾られていた破棄寸前の萎れかけた花や枝についた実で代用したそれには、心持ち自分を意識してニコニコ顔ではなく、つり上がった目を描いた。出来栄えは「意地悪そうに笑ってやがるな、俺そっくりだ。」と目付きだけで判断出来る事に思わず苦笑が漏れてしまう。

ちなみに、ペトラを微笑みながら眺めているエミリアの姿を連写して次々に心のフォトブックに納める作業に抜かりはない。

パチンと紐を切って完成したてるてる坊主片手に席を立ち、二人に並んで外を伺う。豪雨とまで

はいかないが雨粒が水溜まりを叩く激しさに思わず「あちゃー」と顔をしかめた。

「めっちゃ道ぬかるんでそうだなこりゃ。竜車で大丈夫かこれ？車輪ハマらない？」

現代の舗装された道しか知らないスバルの頭の中に、雪にタイヤがハマり進めなくなった車のイメージが過る。車のタイヤと違い木製の幅の細い竜車の車輪は容易く柔らかい地面に沈み込みそうだ。

「うーん、これくらいの雨なら行商人は竜車走らせるってオットーくん言ってたから大丈夫だと思う、けど……」

「けど？」

「『風に加護が切れたりしたら、上下に左右に酷い揺れでしばらく竜車見るのも嫌になりますよ』って。だから加護が切れたら使えるようになるまで走らせられないんですって。」

口元に人差し指を宛がいながら思い出す様に語ったエミリアの言葉をしっかりと頭の中のメモ帳に太文字で記す。何せ、今回オットーは同行せずにスバルとエミリア、ベアトリスだけで向かわねばならないのだ。

地竜の綱を握るのは今日が竜車での雨道初体験のスバルである。ちなみに正直自分でも不安しかない。完全に悪道に慣れているフルフー頼みの姿勢だ。

「オットーも連れていきたいけど、珍しくロズっちが執務室引きこもるぐらい忙しいからなー」

領主の天敵は悪天候だと何かで読んだが、確かにここ数日は領主であるロズワールも内政官であるオットーも、てるてる坊主を量産するしかないスバルよりは格段に忙しそうではある。だが、当のオットーに言わせれば、それでも他の領地に比べれば少ない方だろうと言うことだ。

『ナツキさんの言葉を借りるなら、"フットワークが軽い"って奴ですね。こんな力業はあの方しか出来ませんよ……』といつだったか記録書を片手に顔をひきつらせながら話していたが、彼はいったい何を見てしまったのか……

そんなオットーは現在、執務室に缶詰めだ。主に一部流通のストップと作物被害の報告の為に、早朝から何人もの人が出入りしてる様子から、その対応と書類に囲まれ忙殺されていることだろう。

流石にこんな時にちょっかいを掛けてはならない空気ぐらいは読める様になってきたが、それをあえてぶち壊していつも通りに執務室へ突撃するのも一興だ。本人はこれでもガス抜きのつもりなのである。傍迷惑な事に。

止む様子のないあ雨空を見上げ、ひとつ頷いたエミリアはスバルに向き直る。

「お昼を食べたらすぐに出ましょう。...それでも、きっと帰りは夜になってしまうわね。」

「ぐしゃくしゃの道を夜行運転とかゾッとしないな...」

「日が暮れる前までに近くの街まで帰って来ればきっと大丈夫よ。」

「エミリアたんそれフラグ」

「スバル、ふらぐって何？」

不思議そうに見上げて来るペトラの頭に手を乗せて「お約束って事だよ」と笑って返したスバルは、手を伸ばし16体目のてるてる坊主を窓枠に吊るした。

早めの昼食を取った3人が出立した数時間後の夕方に、雨は晴れた。

数日ぶりに浴びた日差しは暖かい朱で、フレデリカは鋭い歯を覗かせる笑みを浮かべながらペトラとスバルが連日作っていたてるてる坊主に目をやる。ペトラは今頃おまじないが効いたと喜んでいるだろう。

夕食のスープの番をしている彼女に少しだけここへ来る為の休憩を与えましょう。きっと与えた

仕込みの仕事を全て終らせてうずうずしているだろうから。そう足早に部屋から去ろうとした時、常人よりも聴覚の良い耳が微かだが『カン』と軽い音を拾った。

「...あら？」

何かと音のした方へ目を向けると、一体のてるてる坊主。それから.....

.....カン.....カン.....

夕日に紅く照らされたてるてる坊主から、小さな粒の様なものが落ちてきていた。近付いてみると、それは小指の爪ほどにも満たない小さな赤い実であった。人形の頭部に詰め込まれていた物が落ちてきたのだろう。

逆光により、落ちて行く赤い実はフレデリカの喉元から床へと黒い雫の影を作り、カンッと乾いた音を弾けさせる。

そうして床を跳ねころりと足元まで転がってきた実をフレデリカは思わずといったように咄嗟に足を引いて引いて避けた。

.....カンッ

「...括った紐が甘かったのですね。」

妙な胸騒ぎを感じながら、屈んで床に散らばっている実を拾い集める。早く直してしまおうとくくりつけられてる紐を外し、それを手前に引寄せた所で、はたりとあることに気が付いた。

夕焼けに朱く染められている部屋で、とくに窓辺に飾られてるこの純白の人形達はいっそうその光を吸い込んで鮮やかだ。だが、フレデリカが手にした人形だけは他とは違った。

内から滲み出る赤が、白い布を紅く色付かせていたのだ。

指先で摘まんでいた吊るし紐を離し手のひらに乗せてみると、ぐしゃりと鈍い音がして1拍後にまだらだった紅が人形全体に広がってゆく。

.....赤い花卉が固い実に潰されただけ。そうは思っている、他が笑顔を描かれている中で、何故よりなかもよってこれだけは誰かの様なつり上がった目付きをしているのか.....

それまで暖かいと感じていた夕焼けの色が途端に薄ら寒く感じて、フレデリカは紅く濡れた手を洗い流すべく、足早に部屋を出ていった。

たったひとつ、拾い損ねた赤い実が、深紅の光を浴びてその赤を濃く深くさせた。

そっと腕を前へ伸ばす

空から降る雫を受け止める為に差し出されたそれは、しかしひとつも捕まえることが出来ずに、雨粒はするりと手のひらを抜け、地に小さく王冠型に飛び散った.....

雨霽の立ち込める森林に響くさざ波の雨音が、まるで己を罵っている様で、それは鋭く細い針となって無数に突き刺さる。だがしかし、願った痛みは感じられずに通り過ぎてゆくのを目に追いかかなかった。視線を足元から上げ愚鈍とした重たい雲に覆われた空へと移し、ただただいっそ一思いに濡れ鼠になってしまえたらと...

そしたら、きっと彼女は怒るだろうか？

心配して怒って、最後にしょうがないなと笑顔でタオルを差し出すのだろうか.....

「...ひい.....ウクッ...うう、アアア.....」

雨音と木々のざわめき、遠くで雷鳴が響く。そのどれよりも目の前で微かな嗚咽を上げる彼女の声は何よりも大きく聞こえた。

「ど...して.....?っ...なんでえ.....?」

何もない.....中身が空っぽの肉塊と化したスバルの体にすがり付きながら、エミリアは同じ問いを繰り返し懇願する。

どうして死んだのか、なんで死んでしまったのか....。

行かないで、いなくならないで、傍にいて。

幾日にも及んだ雨が止み、徐々に姿を見せた太陽が沈み掛けながらもその存在を誇示しようと世界を朱で染め上げるが、東の空は既に黒く、中天から西に掛けて赤黒い闇が光を食らおうと迫っていた。

その腕に抱かれたスバルの肉体には、もはや何も宿ってはいない。

意識と呼ばれるものなのか、自身でも把握していないそれは記憶を引き継ぎ次へと"戻った"様だ。そして、スバルの魂、残留思念...それはここで、己の亡骸と愛しい娘を見下ろして――

「.....っ！」

ナツクスバルの意識は、まるで酸素を求め水面を突き破るかの勢いで覚醒した。

瞼を恐る恐ると持ち上げる。室内は暗く、まだ夜明は遠いことが伺えた。

耳に届く微かな寝息へと目をやると、すぐ隣にはこちらを向いて丸めた手を口元に当ててあどけなく眠るベアトリスの姿が僅かに射し込む月明かりにうっすらと照らし出されている。

その規則正しく上下する肩にそっと胸を撫で下ろした。毎晩の様に死のレイトショーを鑑賞するスバルはマナが乱れるのか、時折ベアトリスを起こしてしまう事があるのだ。悪夢から目覚めれば、スバルの手を握りながら心配そうに此方を伺っていたことは数知れない。

その日はスバル好みのツンデレの黄金比が崩れてデレばかりになってしまうのが、残念でありどちゃくそ可愛いのだが.....

このままではどうせ眠れないだろうと体を起こしベットから出る。寝巻きから軽装へと着替えてそろりと廊下へ出て厨房へと向かった。

大きな窓からぼんやりと入る月明かりに照され、しんと静まり返った廊下を進忍び歩きながら先程見た夢を振り返った。己の死ではなく死後とは、いつかの試練を思い出して胸が苦しくなるほどの圧迫感を覚えるのも致し方ない。そして、あんな夢を見てしまった検討もついている。

(久しぶりに死に戻ったからか.....)

スバルは厨房で鍋にミルクを入れ温めながら、今日の出来事を思い出す。

何日も降り続いた雨は止んでいる筈なのに、それなのに、スバルは遠くに雨の音が聞こえる気がした――

「止みそうに無いわね……」

急激に引き上げられた意識にしばし瞠目していたスバルは、耳に入ってきたエミリアの言葉にすぐさま状況を理解した。

顔を向ければ、今朝と変わらずに窓枠にてるてる坊主をぶら下げているペトラとそれを微笑ましく見ているエミリアの姿があり、死に戻ったと確信したと途端に震え出す腕を叱咤して立ち上がる。

本当は、出立を明日にでも伸ばしてしまえば、それだけで回避できる……けれど、スバルは見ていたのだ。自分達の前を走っていた竜車が土砂に呑まれるのを――

だから、ここで逃げたらあの者達を見殺しにすると同意だ。

だから……

「エミリアたん、昼まで様子みる話なんだけど……ちょっと早めに出ない？」

初めての雨道故に余裕を持って出立したい旨を伝えると快く了解したエミリアがそのむねを口ズワールに伝えに行くのを見送り、安堵の息を吐く。

元々後は出立するだけだったので、直ぐにそれからすぐに出ることができた。前回は竜車の中で数時間も移動するのに飽くのでは無いかと連れなかったガーフィールも、今回は近場とはいえ雨

天に紛れて襲撃される可能性がある事を理由に連れていく事もできた。

目的の街で用事を果たす所までは順調に進み、帰路に着く。どこで土砂崩れに巻き込まれたのか、大まかな位置は行きの際に確認済みだ。

スバルの体感では後1時間程でロズワール邸に到着出来る地点で、フルフィーに街道端に停まるように指示を出す。すると竜車の中から声がかかった。

「大将んな所で停まってどうしたってんだよ？」

「……………なあ、ガーフィール。気のせいかもしれないけど、地鳴りが聞こえないか？」

「スバル、何かあったの？」

「いや、何か起きるかも知れないからそれを今から確かめるんだ。てことでガーフィールちょっと降りて……いつ降りたお前！！？あと、該当者羽織れよな！びしょ濡れで帰ったらフレデリカに怒られるのお前と監督不届きな俺だぞ！？」

いつの間にか竜車を降りていたガーフィールにスバルはぎょっとして目を見開く。物音すらしなかった……

そんなガーフィールは叫ぶスバルをスルーして、じきに崩れる(予定の)地を無言でじっと睨む。それからしばし間を置いて、濡れて額に掛かる前髪を鬱陶しげに掻き上げながらくるりと御者台に座るスバルを仰ぎ見て一言。

「今すぐ崩れてもおかしくねエなァ」

「のわりに余裕だな！？」

「おかしくはねエけど、崩れる瞬間はわかっから心配すんなよ大将。にしても、よくこんなちーさな地鳴りが聞こえたな？」

実のところ、地鳴りなんて聞こえて無かったのだが、土砂崩れの前は地鳴りがすると現代で学んでいたので当てずっぽうで言っただけだ。こうやって停車して耳を済まして聞こえるのは雨音

だけなのだが、ガーフィールドには木の根がぶちぶち切れる音まで聞こえているらしい。なんて聴力だ。

んで、俺は何をすればいいんだ？そう視線で問い掛けるガーフィールドに、スバルは進行方向を指差す。

それだけで十分だった。

意思を汲んで直ぐ様走り出したガーフィールドを見やり、それとは反対方向へと竜車をUターンさせながらエミリアに声を掛ける。

「エミリアたん、ベア子、状況説明いる？」

「.....必要ないかしら。それよりも、横転なんてさせるんじゃないわよ」

「大丈夫よ、それに.....微精霊達が騒がしいの。すごく慌ててるみたいに。だから急いだ方がいいわ...あっはい、縄」

竜車の中から差し出された縄を受け取り、しっかりと体を固定させた。

「それじゃあ、しっかり捕まってろよっ！！頼むぞフルファー！！」

風に加護が切れた竜車は、雨にぬかるんだ悪道を引き返した。全速前進で爆走だ。我ながら思うが、正気の沙汰じゃない。

「ぎにゃ～～！なのよっ」

「きゃあっ」

「口開くなよ！舌噛み切るぞ！！」

「その忠告はちょっと遅いかしら！？」

振動とか生易しいものじゃない。階段を自転車で下った時以上の衝撃に体が吹っ飛んでいきそうだ。

スバルと竜車を繋いでる縄が腹に食い込んで胴体が千切れそうな痛みに、ガーフィールが使わなかった外套でもなんでも挟まなかった事をことさらに悔やんだ。

そうして、街道と斜面が離れた所まで戻ったスバルはフルフーの綱を引いて停まる様に指示を出す。泥で滑り竜車が流され、ドリフトの様に横滑りする中で叫んだ。

「頼んだぜ、エミリアたん！！」

フルフーが上手いこと遠心力を逃がしてくれたお陰で、横向きで停車した竜車の扉がバンッと勢いよく開かれた。スバルからはその姿は見えないが、「まかせて！」と凜と響いた声にひとつ頷き、胃から競り上がってくる物を意地で飲み込んだ。

雨天で風に加護が切れたら竜車を走らせない意味がよく身を持って知った。この短距離でも、まるで体をシェイクされたあげくに地に叩きつけられた……そう錯覚してしまう乗り心地だった。

濡れた体に叩き付けられる風が、容赦なく体温を奪ってゆく。寒さに震えてカチカチと鳴る歯を強く噛み締めて黙らせたスバルは、。

視線の先には、あっと言う間に創り上げられた氷の壁があった。傾斜から街道を横断して森まで続く氷壁はスバルの背丈ほどだろうか……その壁は厚く、これでしばらく誰も通行出来ないだろうと息を着く……

「これでどうかな？もっと高くしたほうがいい？」

「いや、ばっちりだよ。高くし過ぎてこっちの状況見れないと強行突破してくる奴とかいそうだろうし。」

「そんなスバルみたいな人あまり居ないわよ」

「いや、オットーなら鼻で笑って森抜けてくるから。なあ、フルフー？」

軽く冗談のつもりだったが、つい、とあらぬ方へ目をやるフルフーにマジでやるのかよと顔をひきつらせた。それが商人と言うものか、オットーだからなのかは判断が着かないが、多分正解は後者だ。

その後、反対側を封鎖してる筈のガーフィールドの元へと竜車を走らせながら、軽く飛び掛ける意識の片隅でふと思った。

(…………フルフーに騎乗した方が良かったんじゃないか?)

あまり騎乗向きの地竜ではないが、こんな尻の下で上下左右に暴れるものよかマシな筈だ。

実際には、本当に騎乗の方が雨道の影響を受けにくく、風に加護が切れたら騎乗に切り替える者は多い。それだけ泥でぬかるんだ悪道を高速で走る竜車は凶悪な乗り心地なのだ。

ガーフィールドの元へと辿り着いた時には、息も絶え絶えで尻と背中と腹の痛みに加え、軽く脳震盪を起こしたかの様に揺れる世界に盛大に呻いた。だが、視界の端でふらふらになりながら氷壁を造るエミリアを支えるガーフィールドにひと睨みくれてやる事だけは忘れなかったが。

それから20分も経たなかつただろうか。

山の様子を伺っていたガーフィールドが「やっぱ始まったぜ」と言った数秒後に、エミリアも微精霊達の様子から何かを感じ取ったのかはっと息を飲む。

竜車の中で目を回していたベアトリスの介抱をしていたスバルがまず聞いたのは、雷とよく似ている様で違うゴロゴロとした地鳴り。急いで外へ飛び出すと、それはジェットエンジンのゴォーとした轟音に変わり、大地が揺れた。

何事かと封鎖されたこの場から去ろうとしてた2台の竜車からも人が何事かと飛び出して来る。

瞬間、山が動いた。

ずるりと生い茂る木々がずれたかに見えた。それは瞬く間に崩れ、流れた土砂が街道を塞ぎ、その向こうの森へと進入する。揺れる大地に膝を着き、土砂が木々を薙ぎ倒すのを目の当たりにして震えた。

現代で何度も画面越しに見たことがあったが、実際に目の当たりにした自然の脅威とはこれほどに恐ろしいのか……

(こんなのにかき込まれたら、そりゃ死ぬわな……)

土砂が街道を押し潰す一瞬、それに巻き込まれる自分達の竜車が見えた気がした。

実際には当時、スバル達の前には3台の竜車がいて、ここから見た場合その影に隠れて見えない筈なのだが……

きっとその3台は反対側で啞然とこの光景を見ている事だろう。向こう側ではその内の誰かが近くの村へと知らせに行ってくれている筈だ。誰も巻き込まれて無いと知れば村人達も当分は近寄らないと思うので、これで二次災害は防げたと判断していいだろうか……

おさまった頃、スバルはガーフィールドに声を掛けた。

「俺達はこの先の村で状況を知らせてから帰るから、わりいけどお前は、先に帰ってロズっちに報告してくれないか？」

ここからロズワール邸まで竜車でも1時間近く掛かる。

だが、ガーフィールドの足なら最短ルートで30分も掛からないのでは無いだろうか。

スバルの頼みに片手を振って快諾したガーフィールドは、ちらりと山を仰ぎ見て顔をしかめる。

「たまにあんだが、この山だけ、異っ常にマナが少ねーからき一つけるよ大将。だから生えてる木の根っこも弱まってっし土地も疲弊して崩れたんだ。よォーく見っと、枯れ木も多いしなァ」

「……………それも含め報告よろしくな」

「あいよ。それと、もうじっき雨止むぜ」

そう呟くと、ガーフィールはロズワール邸の方角へと森へ飛び込んだ。……………あいつ、直線ルートで帰る気か？

それから、本当に直ぐに、村へと向かう道中で雨は上がった。連日あれだけ空を覆っていた厚い雲は流れ去り、温かく柔らかい茜色が視界に入るもの全てを照らす。

そこでやっと肩の荷が降りたスバルは、村へ報告を済ませると、日も暮れ泊まっていく様にと引き留める村人達の申し出を断り、日もどっぴりと暮れた頃になってようやくロズワール邸に戻る事が出来た。

着いて直ぐに、食事も取らずに寢床へと入ったベアトリスは相当にあの竜車にやられたのだろう。きっと当分は竜車へ乗りたがらないのではないか。

かくいうスバルも、追加報告中に意味ありげな視線を寄越すロズワールに突っ掛かる気力すらなく、フルフルを目一杯労り、それに嫉妬したパトラッシュと絆を結び直した後は風呂に入って食事をした後に早めに寢床に入った。そして、いつもの寝付きの悪さはなんなのかと言うぐらい即入眠したのだが……………

ぐつぐつと、ミルクの煮える音で物思いに耽っていたスバルはハッと我に帰った。

急いで手元を見て固まる。スバルの左横からにゅっと伸びた白魚の様な手が鍋の中にとぼとぼとミルクを注いでいたのだ。

「……………この手は…エミリアたんですね？」

「……もう、スバルったらいちいちそんな言い方しないの」

ミルク瓶の蓋をしながら、むっと僅かに寄せられた唇に胸がどくりと高鳴るが、それを押し込めると温まったミルクを2つのカップに注ぐ。

そのまま片方を持っていこうとしたエミリアを制して、戸棚から出した蜂蜜をひと匙カップに垂らした。

「わあ」と紫紺の瞳を輝かせながらカップを受け取ったエミリアは引き寄せた椅子に腰を下ろす。

自身も持ってきた椅子に腰を落ち着けながら、しばし二人でふーふーと蜂蜜の香るミルクを冷ます。温かな無言と啜ったミルクの甘さに自然と顔が綻ぶのがわかる。

「ずっと起きてたの？」

ポツリと呟かれた言葉にふるりと首を振る。

「いや、爆睡してたんだけど……………あれ？なんか変な夢を見て起きた様な…………？」

「嫌な夢ならそのまま忘れたほうがいいわ」

「エミリアたん？」

「……ありがとう、とっても美味しかった。また容れてくれる？」

飲み終えたカップを起き、立ち上がったエミリアの問い掛けに「もちろん」と返すと、ふわりと

その顔に笑みが広がる。

「楽しみにしてるわ。それじゃあ、また……おやすみなさい、スバル」

何故か、何故だか分からないが、その笑顔を見たスバルの瞳は揺れ動いた。鼻の奥がツンと沁みて思わずエミリアへと手を伸ばすが、それより早く扉は閉じられ、行き宛を失った手はゆっくりと下ろされる。

そして、残っていたカップのミルクをぐいっと飲み干し、テーブルに置いた瞬間、、、

スバルは眩しさに目を開けた。

ゆっくりと寝ていたベッドから上体を起こすと、そこは自分に宛がわれた部屋で、隣にはベアトリスがあどけない表情で眠っている。

開けっ放しだったカーテンから射し込んだ朝焼けに目が覚めたようだ。

まだ早い時間で、魅力的な二度寝の誘惑があるが、そんな気にはならず手早く着替えて身支度を整えるとそろりと廊下へ出る。

厨房に行くとフレデリカが芋の皮を剥いて朝食の用意をしている所だった。

朝の挨拶に声を掛けると、すでに居ることは分かっていたのだろう。驚いた様子も見せずに返される。

「おはようございます。昨日はお疲れの様でしたから、きっと今朝はゆっくりなさるかと思いましたが.....」

「久しぶりの朝日を堪能するのもおつかと思ひまして」

そうちゃらけながら手を洗い、包丁を片手に椅子に腰掛けると、目の前に積まれた芋の皮を剥きに掛かる。

それに微笑みながら礼を返したフレデリカは、途端に申し訳なさそうな表情で手を停める。

「スバル様.....申し訳無いのですが、昨日作ってらした人形を夕方にひとつ壊してしまいました。中身が花の物です。実が落ちてきていたので直そうとしたのですが、潰してしまって.....」

「...え？いや、それぐらいなら全然いいよ。そんな気にすることないから！」

作ったことすら記憶から抜け落ちていたスバルはそう言うが、それでもフレデリカの表情は浮かばれない。

「それに壊れたの夕方だろ？雨が上がったら、もうてるてる坊主のお役目は終了してるから処分していいん物なんだから」

「捨ててしまわれるのですか？」

「手の込んだ物じゃないしな。雨が降る度に、晴天を願って子供が作るおまじないなんだよ。大事な日の前日に雨が降らない様になって作ることもあるけどな」

ちなみに、逆さに吊るすと逆の効果で雨が降るおまじないになる。幼い頃に両親と出掛ける前日に作ったてるてる坊主が、朝起きたら逆さ吊りになってて外は雨が降っていて泣いたことがあると、実体験を語れば、フレデリカは手を口許に当ててふふふっと小さく笑みをもらす。

談笑してる合間に皮剥きを終えた野菜を洗っていると、声が掛かった。

「あら？スバル早いよね？」

「俺はむしろエミリアたんがペトラより早起きしてきた事にビックリだよ。」

「おはようございます、エミリア様」

「うん、おはよう、フレデリカ。なんだか今日はスッキリ起きたの。毎日こうならいいんだけどね」

普段から朝が弱く起きるのに苦労しているエミリアは残念そうに眉根を寄せるが、寝起きのぼーっとしたエミリアたんマジ可愛いと常日頃思っているスバルは内心で、ぜひそのままの君でいてくれと願ったのは秘密だ。

「スバル様、じきにペトラも参りますしここはもう大丈夫ですよ。ありがとうございました」

フレデリカの気遣いを有り難く受け取り、エミリアと厨房を出ようとしたスバルはあるものに目を止める。

「フレデリカ、これ使っていい？」

スバルが指差したのは、ミルクが半分ほど入った瓶。

「ええ。朝食でもう使う予定はありませんからどうぞ」

了承を得たスバルは厨房の中へと引き返すと小鍋の中に瓶のミルクを全て注ぎ温め始めた。

「あ、聞くの忘れてたけど、エミリアたんも飲むよね？」

振り替えてそう聞けば、廊下から顔を覗かせていたエミリアは笑顔で頷くと、トレイを取りだし、その上に底の深いカップを乗せてスバルの側に置く。

出来た娘だ。是非お嫁さんにしたい。

好きな子が台所に立っている姿はどうしてこうも胸をドキドキさせるのか。親父が料理をしているお母さんの後ろ姿を幸せそうに眺めている時があったが、なるほど、今ならその気持ちがわかる気がする。「見飽きないの？」と聞いた自分は父が言うように、確かに不粋であった。

温まり沸々と小さな泡が浮いてきたミルクをカップに入れ、手早く鍋を洗うと、戸棚から蜂蜜を……あれ？

見当たらない蜂蜜を探して視線をさ迷わせれば、それは自分のすぐ手元に置かれていた。はて？誰かが使って片付け忘れたのだろうか。ふと疑問に思ったが、些細な事と流して、その蜂蜜の瓶を取るとそこからひと匙つつカップに入れる。それを見てさらに嬉しそうに笑みを深めたエミリアの姿を見ただけで、早起きは三文処か小判でも足りない程の徳を得たというものだ。

さてと、持って行くかとトレイを持ち上げる直前に、その上にフレデリカは数枚のクッキーの入った皿を置いた。

「朝食までまだ時間がありますからね。お二人とも、昨晚の夕食はいつもより召し上がられていないようでしたから」

「……もしかして腹の音聞こえてた？」

スバルの問いに完璧な笑みを返してきた事が答えだろう。年上のお姉さんに腹の音を聞かれて恥ずかしくない男子は多分居ない。スバルも例外ではなく、うあーとトレイを持ち上げると再度礼を言ってそそくさと厨房を出た。

廊下で待っていたエミリアは、微かに頬が赤いスバルを不思議そうに見やる。

「どうしたの？」

「社会の窓が開いてた時…みたいな？」

「ごめん、ちょっと意味がわからないわ」

そんな事を話ながら廊下を歩いていると、湯気のたつ桶を持ったラムと遭遇した。

「エミリア様、おはようございます。今日はバルスと揃って寝坊されるのかと思ってました」

「ええ、おはよう。……そんなに私ってお寝坊さんかしら？」

「そうですね。間違いなく、この屋敷で起きるのに一番時間が掛かっていると思います」

一切フォローせずに言い切ったラムに、自分でも自覚のあるエミリアははうっと声を漏らす。

「ラムはこれからロズワールの所か？」

「当たり前でしょ、ロズワール様を起こしするのはラムの特権なんだから」

何を当たり前の事を聞いているのかしらこのバルスは、と声が聞こえてきそうな視線を寄越すラムにふと聞いた。

「前にレムから聞いたけど、ロズワールって姉様が起こしに行くってだいたい起きてるんだろ？」

レムの名が出た一瞬、ラムの顔が強張った気がしたが、次の瞬間には勝ち誇った顔で宣った。

「起きていても、ラムがじっくりご尊顔を眺めてる間は眠ったふりをして下さるのよ。そのお優しさが、ラムの一日の活力になるわ」

性格や口調は違うが、やはりラムはレムの姉でレムはラムの妹なんだなと再確認してしまう。こうゆう所が実にそっくりな姉妹だ。

ラムと別れ、訪れたのは昨日でてる坊主を飾った部屋だ。

テーブルにトレイを置き、椅子に並んで腰掛けた二人は、カップを手に取り、程よく冷めたミルクをすする。

「すっごく美味しいわね」

エミリアの言葉に頷きながら、茜色から白い輝きが変わった日の光に目を細め口を開く。

「今日さ、エミリアたんとこれ飲んでる夢を見たんだよ。こんなに早く正夢になるとは思わなかった」

そう呟かれた言葉に、エミリアは紫紺の瞳をぱちくりと瞬かせると、ふふふと柔らかい声で笑った。そして、こっそりと秘密を打ち明ける様に目に好奇の色を浮かべた。

「私もね、起きてからなんだか温かいミルクが飲みたいなーって思ってたの。それで厨房へ行ったのよ？そしたらスバルが飲むか聞いてくるんだもの。どうして分かったの！？ってビックリしちゃった」

「それは俺とエミリアたんの心が通じあって以心伝心出来たってこ「偶然でも嬉しいわね」ぐはあ！なんだかずっぱり袈裟斬りにされた気分だわ」

「ふー、え？何か言った？」

「うん。エミリアたんは今日も可愛いねと言いました」

「また、そんな事言って……」

しばしの間、そう談笑しているスバルとエミリアはこの部屋にいる第三者の存在には気付かなかった。

実は長椅子で仮眠を取っていたオットーである。

自室のベッドでは熟睡してしまうのを恐れて、だがしかし、睡魔に襲われフラリと入った談話室。

少しだけ、日が昇ったらまた書類を片付けよう。

そう思って寝入ったら、まさかそこが穴熊の巣になっているとは……

(いつ出ていけばいいんでしょうか……)

今出ていけば、今日はスバルからの照れ隠しと報復で数割り増しでちょっかいを掛けられるだろう。

眠った振りをして見つかった場合は、どんな悪戯をされるか……

やはり、ここはひとつ息を潜め、二人が出ていくのを待つのが最善だろう。よし。

だが、そこはオットー。

乱立する負ラグの回収に定評のある彼を楽しいことが大好きな神様は見逃さないのだ。

スバルがそろそろベアトリスが起き出す頃かと思った矢先、ドアを少々乱暴にノックして入って来たのはガーフィールだ。

「大将とエミリア様、もうすぐ朝飯が出来る……オットー兄、何してんだ？」

数拍後、スバル達からは背しか見えなかった長椅子の死角からオットーががばりと顔を上げ洗面を作り叫ぶ。

「察してくださいよっ！！！」

「察したから、声掛けたんだろ？」

ニヤリと悪魔の様に笑うガーフィール、それに……

「ガーフ、今日は7オットーを俺に譲れ」

そう鬼掛かった凶悪な笑みを向けながら近付いてくるスバルにオットーは喉をひくつかせながら、そろりと後ずさる。

足を引いた分だけ、いやそれ以上に踏み込んでくるスバルは、エミリアにはちょっと見せられない程に口の両端を吊り上げた。間違っても、ちまたで新たな英雄と呼ばれる者がする顔じゃない。

だが、オットーの前にいるスバルは、好きな娘との一時を垣間見られた羞恥と怒りを免罪符に友達と(で)遊びたいだけの少年なのだ。

「何して遊ぶ？」

10年以上口にしなかったその言葉を悪人面で問い掛けてきた友人の横をすり抜け、オットーは談話室から飛び出した。

それを軽く屈伸しながら見送り、スバルはエミリアへと声を掛ける。

「それじゃあエミリアたん、先に朝食行っててくれ！俺もオットー捕まえたらすぐに向かうから」

「オットーくんも疲れてるんだから、あまり迷惑掛けちゃダメよ？」

「弱ってるからすぐに確保出来るよ」

遅すぎる忠告に親指を立てて頷いたスバルはガーフィールドを伴い、部屋から出ていった。

「ちょっと羨ましいかも……」

遠くでオットーの上げる声を聞きながら、ロズワール邸の"変わらない"日常にエミリアはふふっと小さく笑った。

変わらない日常の為に、犠牲にしてしまった日常がある。

常にスバルの足下にはこれまで死んでいった自分と、それだけの過ぎた世界が在る。

日も暮れてしばらく立ち、帰らない3人を心配しつつも、大事を取ってどこかで一泊しているのだろうと不安を押し殺していたロズワール邸に一人の男が駆け込む。

単騎で相当急いで駆けてきたのだろう、全身に跳ねた泥を纏った男が息も絶え絶えに口にしたのは、街道で土砂崩れが発生したという一報だった。

やはり起きたかと気を引き閉めた瞬間、現場の位置や発生したと思われる時間帯を聞いたオットーが固唾を飲んだ。いや、だって...それは……

「っ、ナツキさん……！」

バンッー！！

ある可能性に思いあたった者達が顔をしかめる中で、思わずオットーが口にした瞬間、凄まじい勢いで何かが側を駆け抜けドアを突き破る勢いで開き外へと飛び出していった。

「ガーフィール！！？」

その姿を確認できたフレデリカが弟の名を叫ぶ。

だが、背後からの停止の声を振り切って放たれた矢の様に飛び出したガーフィールは、ぬかるんだ道をものともせずどんな地竜よりも速く地を駆けた。

森を抜け、山を越え、身体能力にものをいわせほぼ直線で現場へと辿り着いたガーフィールは一際高い木の枝に飛び乗り、状況を確認しようとぐるりと辺りを見回す。

半月の僅かな月明かりだけでも、その夜目は十分に自然の生み出した凄惨たる現場を写し出した。

街道横の鬱蒼と木々が生える傾斜の一角が崩壊し街道やその向こうの森林をも土砂が飲み込んだ様子が見てとれる。元が竜車なのか押し車なのかも分からないほどに原型を留めていない残骸も広範囲に散らばっているからして、数台は捲き込まれた様だ。

多くの松明が燃やされ、近隣の村の男達が懸命に土砂を掘り返しているが、雨水を多く含んだ土砂に潰されたのだ……これ以上の生存者は恐らく絶望的。ガーフィールはそう判断して木から飛び降りる。

脳裏に己の母の事がちらつき、強く噛み締められた歯がキチリ音を立てた。

また新たに土砂が崩れ二次災害が起きればより甚大な被害が出るだろう事は想像に固くない。地に着いた足からも、この付近の地盤が現在どれだけ不安定か伝わってきていた。

ここからこの者達を遠ざからせ様と土砂へと近づいたガーフィールは足を止めた。

「坊主、アブねーからあっち行ってろ！」

己の息子とそう年の違わなそうな外見のガーフィールに向かって声を荒げた男は、次の瞬間、険しかった顔を初めて親に怒られた時の子供の様な表情へと変えた。

目の前で何が起きたのか理解できなかったのだ。

常人よりも逞しい.....けれども傍目から見てそれだけの片手だ。それが、大の男が10人掛でようやく動かす事が出来る木の太い幹を掴み、半分近くを土砂に埋もれたそれを片腕で引き抜いたのだ。

ギ...ギギガギズガァァー

引きずり出された木と土砂の上げる音だけがその場に響いた。

周囲驚きのあまり沈黙するのを意に返さず、ガーフィールは折り重なる様に土砂に埋もれていた木々を次々と引っこ抜く。

そして、6本目が引き抜かれて直ぐにそれは現れた。啞然と沈黙していた者達の口からどよめきが広がる。

深い藍色をした地竜の頭が息も絶え絶えに土砂から生えていたのだ。

この位置から流されたのではなく、いち早く土砂崩れに気付き、森の方へ向かったのだろう事が見てとれる。ガーフィールは、何かを訴えかける様に首を捻る地竜を落ち着かせながら土砂に手をかける。水を多く含んだ泥の中に大きな石が多くあった。こんな物に潰されさぞや息苦しかった

ただろう。頭ひとつ分で窒息を免れただけでも十分に奇跡なのだが。

「わってるから慌てんなよ。手元が狂うだろオがよオ」

急いで地竜を救い出さねばと駆け寄ろうとした男達が動くより先に、ガーフィールの触れていた土砂にポツカリと穴が開く方が早かった。

「……………え？」

漏れでた声とゴクリと鳴る喉。誰だか分からない、もしかしたら無意識の自分からかもしれない。

そうしている間に、ガーフィールは地竜を救出し終えていた。

その後、土砂から一台の竜車を掘り出し、御者台に座っていた男性の亡骸とひしゃげた竜車の中の僅かな隙間で生存していた少年を助け出したのを見届けて……………

背後で見ていたスバルはほっと胸を撫で下ろした。

「……………他は今掘り返すのは無理だ。どっちみち生きてはいねえよ、これ以上はまた土砂が崩れて来やがるから手エ出すな。……その前、他に生き延びた奴はいねえか？」

地竜を荷台に乗せていた男達へと問い掛けると、その中でも一段と年かさだらう老人が前へと出てきた。

「わしらがここに駆け付けた時、銀髪の少女と地竜は土砂に埋もれることなく、押し流された所から自力で脱出した様なので、保護しました。この道を抜けた先の村にいます……………が、」

歯切れが悪くなった老人がそろりとガーフィールを伺う。銀髪の少女と口に入れて出してから途

端に険しくなったその表情が、先を口にするのも戸惑わせた。

「……………彼女はそう年も変わらぬ少年の亡骸を腕に抱えていました。竜車が横転した時に身を打ったものと……………」

「っ……………二人、だけか？」

震える声で何とか発せれたと思わしき声で問うてきたガーフィールに老人は頷く。

「金髪の……ちっさな子供も一緒に居た筈だァ。そこには居なかったのか？」

頷いた老人に「ってこった」と呟き、その村へと走り出したガーフィールを見送ったスバルは、感情の起伏を感じられない声で誰にも聞こえない呟く。

『無事に帰るって、約束守れなくてごめんな』

"己"が少しずつ波に浚われる様に薄れ行くのを感じながら、先程からスバルを慰め様としてどうしたらと背後で腕をさ迷わせている"彼女"へと、初めて声を掛ける。

『お前も……取り残されたのか？』

自分に。そう言った瞬間、スバルの周囲から色が消えた。

松明の明かりに照らされた森と土砂の山は無くなり、そこは闇の霧が立ち込める"いつもの"場所だと気付く。

目の前には、泣きそうな顔をした彼女がなんでと困惑した声で続けた。

『.....もうここには、私だけの力じゃ連れて来れない筈なのに.....なんで?』

『...ここで自分の体があるって、なんだか不思議な気分だな』

『.....っ、ああ.....』

欲しかった部位が全部揃ったのに、スバルは震える彼女へと手を伸ばさない。

あれだけ声を聞きたくて耳を求めた。

あれだけ姿を見たくて目を求めた。

あれだけ伝えたい言葉があって口を求めた。

あれだけ近付きたくて足を求めた。

あれだけ抱き締めたくて腕を求めた。

狂おしい程に求めたその全てが今のスバルには揃っている。

だけど、それは昴ではないスバルだ。

葉月昴が愛しているのはエミリアとレム、相棒であるベアトリスであり、彼女ではない。

それでもナツキスバルの最愛で唯一求めたのは彼女だ。

スバルは昴であって、昴がスバルであるわけではない。

昴の中に沈んでいたスバルを時おりここへと連れ出していた彼女にもそれはよく分かっているのだろう。

間違ってもこれは彼女が望んだ結果ではない。

だからこれは、限りなくそれに近くとも本当の意味での望んだ再会では無いのだ。

だから嫉妬の魔女を伴ったサテラは、"菜月昴"と共に次へと戻った。

ここにいるサテラとスバルは己に取り残された同士だ。

思う所はある。それを上げればきりが無い。

あんな形で取り残してしまったエミリアもそうだ。

レムも眠りに着いたままで、クルシュさんの事も含め暴食への手懸かりすら掴めてない。

聖域で悟ってはいたが、本当に両親にも会えなくなってしまった。

ウィルヘルムさんの傷の事だって……ああラインハルトに対しても酷いことをしてしまったと思う。十年ぶり位に出来た友人であったのに。オットーにも、誰より先に土砂崩れに気付いて森へと避難したフルファーの功績を伝えたい……あ、自分で本人？本竜？から聞き出すか。

……本当に心残りしかねえや

だけど、まあいいだろう――

そっと手を広げてみせたスバルに、サテラは啞然として、そして抑えきれない歓喜に包まれた。

足を踏みしめ、駆けるのはいつぶりだろうか。

ふらりと一歩前へ進めば、後は転がる様に不格好に彼の元へと向かう。

もはや飛び付いたのか転んだのかも分からない勢い突っ込み、スバルに受け止められ溢れ出た感情の奔流に飲み込まれて、たったひとつ分かった。

嗚呼、自分はこの人が欲しかったのだ。

突き詰めれば嫉妬の魔女と同じだ。

それも、そうだ。嫉妬の魔女はサテラから生まれたのだから。

分かってはいたけれど.....

何度も死に戻りを繰り返させて、目的を達する事に固執しているサテラはここにはいない。

ここには、ただ彼を愛しているサテラしか残っていない。

だから、もういいんじゃないかと思う。

だってもう、彼も彼女も、この世界で出来ることは無いのだから。

世界に対しての罪悪感や責任は、"彼"と共にってしまった私に引き受けて貰おう。いつか、本当に目的を果たせる権利があるのだから、本望だろう。

今は疲れている彼と、世界に知らんぷりとそっぽを向けてしばらく昼寝でもしようか.....

しがらみから吹っ切れたサテラは400年ぶりに微笑み、闇を閉じた。

【あとがき】

全力で土下座したい捏造過多。

読者へ試される読解力。書いた本人も「まったく意味が分からんぞ！」となってる代物です。

なんだこれ.....かんらんさんの素敵絵へ申し訳ない...

補足

- ・全てスバル視点
- ・昴の奥深くで、サテラを愛するスバルがバブ(入浴剤)みたいに溶けて混ざりあった結果が最後のアレ
- ・幽霊みたいなもんなので思考力あまりない
- ・てるてる坊主はルーツである"雨を止ませられなかった僧侶の首を刎ねて白い布に包んで軒先から吊るしたら晴れた"という話からきました。だから"スバルが死んでからスバル人形が壊れ雨が止んだ"んです。
- ・タイトルの柘榴は、床に転がった赤い実が夕日の色を帯びて血の様な色をしており、古来から血肉と例えられる柘榴を赤い実の方に例えたので、赤い実が柘榴なわけではありません。夕方の赤い実=柘榴=血=スバル。なんだこれ.....

あと20個程補足書きたいぞなんだこれ.....

最後に、こんな神絵を描いて下さったかんらんさんと、企画して下さいたりーえさんに最大限の感謝を！

表紙・かんらん様

文・ちゃくや様



ご挨拶に代えて

はじめましての方もいつもお世話になっておりますの方もいらっしゃると思いますが、企画を主催させていただきましたりーえと申します。

まずは、お礼から言わせてください。

素敵な表紙絵を描いてくださった

かんらん様、由様。

素晴らしい文章を書いてくださった

なな様、浜木綿様、宵咲オメガ様、ちゃくや様。

応援して下さった皆様。

読んでくださった皆様。

本当にありがとうございます。

皆様のおかげでこれほど素晴らしい企画になりました。

沢山の人の協力、アドバイスのおかげで電子書籍版まで仕上げられました。

私一人ならぜったに出来上がっていません。

重ねて、お礼を言わせていただきます。

そして次にお詫びを。

私の拙い運営で、参加者、読んでくださる方双方に非常に大きな負担をかけてしまいました。

偏に私の能力不足です。

本当に、ご迷惑、ご心配ばかりおかけいたしました。申し訳ございません。

この企画はもともと、リゼロアニメのあまりに素晴らしい出来栄えに感動した私が勢いのままに発信させたものです。

そこにたくさんの皆様のご賛同、ご協力でこの度完成させることが出来ました。

本当に素晴らしい経験をさせていただきました。

いくらお礼を言っても言い足りません。

最後になりますが、こちらの作品ですがPixiv様の方で先行公開させていただいております。

ご興味おありの方はどうぞ、そちらも覗いてみてくださいませ。

<http://www.pixiv.net/member.php?id=21506462>

0から始めるアニメ最終回企画アンソロジー

<http://p.booklog.jp/book/113616>

著者 : re0kikaku

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/re0kikaku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113616>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト